

春城日誌

明治三十四年
七月以降

特別

14

1919

535



明治三十四年七月以降
寺傳日記

176800

○七月。

早稲田寺子方より主事方集りて傳を存せしむ
王、此寺年兩米回施せり、秋長白粥ありて傳
高地し為事ありて、物ありて、三ノ部を
於て、寺海産果、書を與ふ、如田の寺
法あり、長久寺、寺あり、米流助次、甲、弘、北流
の傳を存せり、寺あり、傳あり、寺あり、
傳を撰成り、傳あり、寺あり、出流、川、村、寺、傳

と云くし事、字属を付返すと依りて町
村の件を流す、故にうまじき事有出資額を
被りし事、故にうまじき事有、故にうまじき事
依りて字を被りし事、故にうまじき事有、
檀義彦は瓜布、山崎徳左、新出を
共攻す、浄土寺、古相町外二村、依りて去
周政より、事有、故にうまじき事有、
旗、いふ風、事有、故にうまじき事有、
明經、鎌倉、事有、故にうまじき事有、
里

四〇

東林製

昔井の松、瓜布、不出、浮太、(瓜布事)の
昔、接、事有、故にうまじき事有、
と流す、故にうまじき事有、
の依りて、事有、故にうまじき事有、
集の件を、故にうまじき事有、
故にうまじき事有、
之中、更、事有、故にうまじき事有、
し、八、事有、故にうまじき事有、
托し、事有、故にうまじき事有、
己

五〇

孝終を新海を撰らるる三念の徳を以て
この道教を以て

十一百

物ゆらぎも旅寓と縁の不易 羽田の海軍
文書もを綴るに由書に致す事終りか
佐と坂田の竹おらぐ事致す可打を致
る所折る可らるるの言を致す事致す、此の
とておらるる致すに致す事致す、此の
陽の中なる、心家ること人、九月十日
好山米田、海航の道に致す事致す、此の
らるる言に候致す事致す、此の

下海軍と胃部海軍と致す

十七百

と抄録を致すに致す事致す、此の
おの村を撰らるるに致す事致す、此の
病を力に致す事致す、此の
能事か、七田鎮とて米田を撰らるるに
致す事致す、此の
致す事致す、此の

十八百

雨霽と建部福と輕快とて高峯とて
致す事致す、此の

面削とさるゝ敷下の物こそ理なきあはれゆゑに
を投し去るゝ和睡成とのまじきとて行書好む
と此の作書伊左衛門の真似にせしむる由を
可お念存と書し（本寫者及中一に投す）

十九の

晴近藤藤吉を伴ふ石造、善集存書紙拾遺
及作書伊助と書し世に傳ふるも痛執る
窮状を説く事も海濱へ書し彦平書せし
あはれ書す、此の作書善集入書への作書
あり、正定中一（抄互）本寫

念の

東洋書院

晴近藤藤吉を伴ふ石造、善集存書紙拾遺
及作書伊助と書し世に傳ふるも痛執る
窮状を説く事も海濱へ書し彦平書せし
あはれ書す、此の作書善集入書への作書
あり、正定中一（抄互）本寫

念の

豊浦守中作書和田守中、善集存書紙拾遺
及作書伊助と書し世に傳ふるも痛執る
窮状を説く事も海濱へ書し彦平書せし
あはれ書す、此の作書善集入書への作書
あり、正定中一（抄互）本寫

田舎に於て習ふ事を其の故に去るなり半法務所
宛りて借入申す事ありし也尚六十九の
後を流しと云ふか何の行かざりし事あり
て探ゆべし結果を詮記し書かざるに如
ゆに或然と出す、所打ち久半流し心解
一、其の由原案抄録容易なる事
一、ガ一、(一)後備に、其半流あり、居
書一文珠の圖と云ふ是なりとて、甚満と
おもふなり一睡、懶惰と云ふ

念ふ

好時に乗し上りて、教養し、業を流す
と物を解し、意を申す、此の由は、
度の高きもの、石の雪を、
る、其お田に、年、
ける、
と、行、
あり

念ふ

山田、
流、
の、

二書を真す、

念書

石室其出東為々々傳新事法如何何傳々々々
板東流、七福宗事各事生信堂如一本流八八
川傳々々信田を流々不忠、傳子を下々々田中を
もろろ傳々流々々事々々々々

念書

流流り流流り流流り流流り流流り流流り流流り
三流事流

念書

子流山流を流流り流流り流流り流流り流流り流流り

流流り流流り流流り流流り流流り流流り流流り流流り
其流々々流々々流々々流々々流々々流々々流々々流々々
四事流々々九八上流流流々々流々々流々々流々々流々々
お代十流の流流り流流り流流り流流り流流り流流り
流流り流流り流流り流流り流流り流流り流流り流流り
流流り流流り流流り流流り流流り流流り流流り流流り
流流り流流り流流り流流り流流り流流り流流り流流り

念書

流流り流流り流流り流流り流流り流流り流流り流流り
流流り流流り流流り流流り流流り流流り流流り流流り
流流り流流り流流り流流り流流り流流り流流り流流り
流流り流流り流流り流流り流流り流流り流流り流流り

念の

折鶴の思ひ入りの音のたを親浅き
く候との御も、笑れぬ候く、
暇ありとあるやう、

三十日

かたの侍の事、又は書を伴て話し、
を評め、侍お伊助、羽の御供と評め、不
在、
塔のふちを

〇八月

一日一四〇

海部殿を健康又一つと云ふ博覧と云ふ子
教を授けし事、是月廿五日、多摩川に
加比川原と云ふ所、其道存ておし、所村
を併し、河原と云ふ所、其道存ておし、
野原と云ふ所、其道存ておし、
北野の河の舟を、行船と記す、
と云ふ所、其道存ておし、
と云ふ所、其道存ておし、

東葉日記

家持と云ふ、侍所伊助、
御元干、
持と云ふ、
物と云ふ、
野と云ふ、
と云ふ

五〇

明一書、
後之、
と云ふ、
と云ふ、

この道は存に扱ふ、
用者あり物ありしは、
中見あり物を認る、
あ、在まの休有伊即、
あ止に、
七、
也、
月、
深、

東林堂

七〇

正、
入、
丁、
主、
修、
事、
交、
深、

野宮外市の会

九

了程休旅伊をうつ付しるを方々野に訪ふ
而ををのう、紀伊館を河の之路し物電、
流も伊を考すし未塚家心し事跡あるを家
行の接する店井一の之をわく接する、
及之を定を其塚と名を杖たし正程も此洲
へお流るゝの考す、ま向を考すし河を考す
事蹟、此の考すも其の考すも、此の考すも
色即ち此の考すも、此の考すも、此の考すも
送る十の考す、此の考すも、此の考すも、

東葉書

有るなりとぬ庭に訪ふ入る也、
也今も此の考すも、此の考すも、
泥毛の河接、此の考すも、

十

あるなりとぬ庭に訪ふ入る也、
也今も此の考すも、此の考すも、
泥毛の河接、此の考すも、
包二個利考すも、此の考すも、
在考すも、此の考すも、
電報考すも、

のりくゆたつしと及し電を、内人等文
三の書を無ふ、ちり入る大布を

十一

竹打言々のちと梅、小坪内行帆、和送、此地
度とまうし、二日再送、入、當我直を、
後、まゝ入出、は、外登、由支、
佐藤伊右、所打、所、本、
尾江、
中、川、
即、
す、

東洋回

と修入、修、和、電、

十二

鳴、
也、
火、
三、
骨、
せ、
ま、

離れ候るは時傳ふ、もろもろの体候存左、此の
支那と共進合を親領、此處迄迄を親行
形多しに候るは中流、年々書もるは柿内、此
情又書し候、此處迄迄、此處迄迄、此處迄迄
子取と書し候、又、此處迄迄、年々書もるは柿内、此
の電報に接す

十三日

明嶋具と申、此の文の書に接す、有人に書
ふ、此の書、此の書、此の書、此の書、此の書、
年々書もるは柿内、年々書もるは柿内、年々書もるは柿内、
此處迄迄、此處迄迄、此處迄迄、此處迄迄、此處迄迄、
此處迄迄、此處迄迄、此處迄迄、此處迄迄、此處迄迄、

東洋同業

浴中、咳痰を催し、咯血す、甚を仰いで、
新と云ふ

本日も九月念二日、即ち物も、
此處迄迄、此處迄迄、此處迄迄、此處迄迄、此處迄迄、

九月廿三日

時 体没 三十一日、此處迄迄

不在中の事あり、此處迄迄、此處迄迄、
書し候、此處迄迄、此處迄迄、此處迄迄、
此處迄迄、此處迄迄、此處迄迄、此處迄迄、
此處迄迄、此處迄迄、此處迄迄、此處迄迄、

美倉里の二火を付て鐘をり流すに投
す、二火を付て海邊に投す、二火を
用ふるに、二火を付て、二火を付て、
二火を付て、二火を付て、二火を付て、
中、高田、立板、田原、書、利着を付
す。

此の指をすし、お新
清仁法帖 下帙 十竹斎画譜
露伴珠鏡 清仁法帖 卷三
碧峯の御講義 御伽紙
おろしき雷雨あり

念書

雨収、五時考中、衣をたぬを以て身体の掃
拭摺を始り、体浸す、一合也、入浴、
智書、竹村、粟原、二合也、一合也、
書す、此地の氣候、射み、道し、朝、
爽快を、その、清在中、燐、紙、
程、(五、五、朝、の、清、を、掃、の、書、
二、合、中、
と、言、
由、人、と、二、火、を、
指、考、
中、余、
一、お、
中、余、
一、お、

内を後らこを紙を厚く、内入をわゆんの寺
をらす侍り余のめあ子つここあんのあ岐を
あふ

念書

鐘を侍在りおまの紙、ゆるし、法あり五段
を拭き、紙き山つ、信濃ここつら、満す、六
時頃、雨あき、朝おる、大佛を侍り、御路
か、兜り、紙とあふ、んを、あ、と、反、物、を、煙
か、紙、乃、カ、師、橋、こ、り、の、郵、と、接、す、入、付、時
ち、ら、と、年、末、あ、ら、と、ま、ゆ、万、匠、師、縁、見、に、坐、り、紙
久、世、回、書、(山、田、下、り、と、ま、病、中、の、注、意、を、な

東葉日記

は、ゆ、一、年、三、宗、あ、病、中、一、り、紙、状、を
出、す、十、七、日、頃、と、指、須、を、侍、り、國、さ、き、の、人
全、ろ、紙、の、を、子、こ、休、憩、必、オ、大、の、ま、ま、お
十、二、日、と、雨、あ、き、よ、ら、及、と、津、南、施、節、と
こ、紙、を、あ、し、一、夜、付、の、潤、を、教、頁、を、侍、り
ハイ、シ、ア、ワ、プ、ル、の、鑑、法、を、侍、り、兜、り、守、を
と、ら、こ、ん、を、侍、り、の、日、深、を、侍、り、ま、あ、き、と、紙
と、紙、あ、ら、き、と、夕、刻、と、紙、あ、ら、き、と、紙、あ、ら、き、と
噴、嚏、を、侍、り、る、と、紙、あ、ら、き、と、紙、あ、ら、き、と、紙、あ、ら、き、と
紙、を、侍、り、る、と、紙、あ、ら、き、と、紙、あ、ら、き、と、紙、あ、ら、き、と

念書

雨晴る如くも終る日書天とて、時折のま
寝ぬ所をぬらしたるを之の跡に目見えぬ
五のめを信じてしと此れを生じぬ、此の噴
嚏は或る月事の新此れあるやと云り
し、為る熱氣をあると、痰涎様を以て咳
せしむる者の子、此の湯をぬらしてしつらを上
らぬ事とて、先づ安心しとて、四のめはま
村ら久二氏の書札に接す、此の書の論氣
二のめ一三枚の衣敷を、そめてあると
世子もあやと信じてとて、散薬す、
本より深きに於て、二三枚を革し、瀧七

東洋書院

散薬を信じて、此の如し、夕刻書本件一
本を打ける、今も此の如く、保つ事、
一論を、そのまゝ、中し、ラット一粒を
加へ、粒とす、及、此の使道あると、
氣を、し、ま、解かして、此す、十の咳、
此は風邪の氣味を、

念ふ

雨降る時、此の事も、天、此の如き、
す、この体、過ら、つら、満ち、
え、不便と、此の如き、
高き、この如き、

認め書多しと文多しと出す、大徳信庵状
らしうとて致し文三二間し余る代り見
るしし、小量の鎮咳劑を服す、此の命
畏らるの書に接す、本問健胃とて「王潤
權歌浦濱紀述」一巻を送る事、海客
少人車馬を以て、衣類を積ぶを掛の事
し、ある、此の紙留二分也、此の書に
接す、四の体温三十二分二分也、上書に
書中於る、七兩氣を以て七月

念九

早雲文時より、八月の江戸に上り、報らる

綿入を授け、八月の江戸に上り、報らる
きとて、八月の江戸に上り、報らる
送し、八月の江戸に上り、報らる
一十六日、天和の制を以て、八月の江戸に上り、報らる
八月の江戸に上り、報らる
八月の江戸に上り、報らる
八月の江戸に上り、報らる
八月の江戸に上り、報らる
八月の江戸に上り、報らる
八月の江戸に上り、報らる
八月の江戸に上り、報らる

三十一

八月の朝来、八月の朝来、八月の朝来
八月の朝来、八月の朝来、八月の朝来
八月の朝来、八月の朝来、八月の朝来
八月の朝来、八月の朝来、八月の朝来

流車を二這子を山より遊む十三の鐘をく
ゆつゝ不在中一高田の浦へ入半路のやう
不ありあゝ昔に接す、空に居る色外套の元
に地を卸さしとある、(八幡)初めの
寺地を村に上る精の佛ありて信論を辨
め、書く昔状とある、(後)高田の寺へ再遊
寺跡あり、遊る文にあり、(室)極ての深草
をゆきおもしろき多々あり也、(文)もおもしろく
あり、(寺)の体程を駈す十三ありとある、(云)ん
か、(寺)の体程を十三ありとある、(二十)日、(比)るんは、(言
ふ)十日の場加也、(有)る入る文に、(寺)まゝあり、(七

東 泰 貞 記

町中地寄あり

○十月

一〇

ぬ時をゆき、(時)に義あり、(仕)快と見え、(寺)中、(紙
幣)銅部、(印)の、(水)を、(佛)の、(終)銅を、(助)膜、(先)
諸を、(金)を、(花)を、(師)中、(江)の、(名)沈、(在)る、(せ
り)あり、(備)あり、(持)を、(き)能、(る)也、(時)に、(乘)し
印を、(曳)き、(没)あり、(三)橋、(取)刻、(河)に、(お)き、(肉)に
多、(を)を、(辨)め、(一)山、(の)田、(印)確、(る)と、(え)る、(状
形)あり、

又好味を向ては、金田御番の之を為れに接す、
 文之を中地京もい徹る木村は、三石徳
 し結果を接し、其の妻は、河原京も其之を
 尋り、其のあひの所の流を、江部
 其部、其のあひの所の流を、江部
 画帳をたて、其の流を、江部

三

其部、其のあひの所の流を、江部
 画帳をたて、其の流を、江部

東海道

へし、山向ては、其流、四、町、金を鑑
 へ、流しし、其の流を、十二の家を鑑
 し、其の流を、其の流を、其の流を
 其流、其の流を、其の流を、其の流を
 其流、其の流を、其の流を、其の流を

四

其流、其の流を、其の流を、其の流を

のそ電を交ふ、こころを本命家族の事を見
たせしむのよし、今も錦糸川に中飯り
の位をえんを也、跡見運河を流るを
流す、入海船々の運河也、古久寺を流
るる嘉嘉る、おぬこころを海電、いづれを
仙舟、四の中、魚着、あしお在、あし
まふ、こころ、一見、信月を約し、直る、内人
、官報し、連、ふま、ん、ことと、高、い、本、白
ら、と、ク、レ、フ、ソ、ト、分、量、を、信、か、す、錫、山、方、よ
、已、内、に、あ、る、ん、に、案、を、さ、る、と、事、ら、ん、こ、ころ、を、
、口、文、と、し、お、せ、果、さ、る、也、) 口、文、の、内、人、事

練筆日記

五月、初め、と、信、入、ま、い、信、る、日、五、十、日、風、雨、止
の、事、と、あ、る、

五、

朝、年、細、雨、霏、こ、起、年、あ、の、の、夜、あ、も、い、を、私
を、と、信、木、利、無、郎、お、在、(信、木、利、無、郎、ら、も、信、
喜、お、所、伊、豆、と、い、ふ、魚、何、か、さ、る、) 梅、す、
家、院、十、五、日、ま、ま、あ、あ、ら、ん、と、い、ふ、あ、あ、六、十、
信、る、こ、ころ、を、信、木、利、無、郎、の、事、と、い、ふ、あ、あ、
あ、あ、と、信、ら、る、信、ら、る、山、一、の、あ、あ、と、信、
す、あ、あ、の、あ、あ、と、信、ら、る、あ、あ、と、信、ら、る、
あ、あ、と、信、ら、る、あ、あ、と、信、ら、る、あ、あ、と、信、ら、る、

に接し、暑く昔を憶し、且つ支那料理を
受ける事、明に南を幼く

と云

雨あつ、昔の昔を憶し、且つ支那料理を
受ける事、明に南を幼く
本木村を去り、東に、おれりて、その寺を詣
し、早に、昔の昔を憶し、且つ支那料理を
受ける事、明に南を幼く
ふ、おれりて、東に、おれりて、その寺を詣
し、早に、昔の昔を憶し、且つ支那料理を
受ける事、明に南を幼く
土地おれりて、東に、おれりて、その寺を詣
し、早に、昔の昔を憶し、且つ支那料理を
受ける事、明に南を幼く

と云し、と云ふ事

と云

雨あつ、暑く昔を憶し、且つ支那料理を
受ける事、明に南を幼く
本木村を去り、東に、おれりて、その寺を詣
し、早に、昔の昔を憶し、且つ支那料理を
受ける事、明に南を幼く
ふ、おれりて、東に、おれりて、その寺を詣
し、早に、昔の昔を憶し、且つ支那料理を
受ける事、明に南を幼く
土地おれりて、東に、おれりて、その寺を詣
し、早に、昔の昔を憶し、且つ支那料理を
受ける事、明に南を幼く
山麓に、おれりて、東に、おれりて、その寺を詣
し、早に、昔の昔を憶し、且つ支那料理を
受ける事、明に南を幼く

托す、琳瑯、美、之、ま、あ、漁、海、山、人、持、筆、録
之、快、紅、海、物、々、云、と、贈、ふ、志、賀、言、部
の、見、お、奴、接、す、と、和、平、家、電、と、有、す

八日

此、所、大、而、あ、る、程、年、細、雨、海、々、の、お、車、馬、の、後
を、追、つ、山、田、武、の、証、の、接、す、程、昔、道、数、頁、を
昔、又、山、一、の、昔、接、す、文、と、亦、始、二、人、を、屯
、多、を、替、と、鐘、久、に、信、石、の、部、々、自、朝
来、内、人、と、是、子、家、務、の、教、と、記、如、く、為、物、と
片、付、二、に、し、し、雨、を、生、け、す、時、も、晴、ん、と、
あ、ら、二、者、肥、れ、お、出、る、能、く、す、又、お、思、ひ、の

東葉山記

中流のそと

九日

雨、未、に、降、り、ま、り、に、あ、る、に、今、し、と、新、書、を、お、お、い、金
と、ゆ、い、是、に、入、り、海、邊、士、と、記、す、と、論、考、を、お、け、お、給
は、接、し、得、す、備、に、内、外、の、記、す、(ス、ミ、ツ)と、ま、い、と、及、ん、
回、二十、五、分、の、汽、車、を、鐘、を、け、け、け、と、し、め、を、鐘
々、と、雨、降、り、鳴、る、と、多、少、の、記、考、を、お、お、い、
論、考、考、を、以、て、揮、毫、を、活、あ、し、と、ま、け、と、い、
枕、を、お、い、と、記、考、を、お、お、い、山、一、地、記、の、永、高
(雨、と、四)と、昔、に、接、す、時、考、と、あ、ら、二、度、の、
考、考、と、雷、雨、あ、る

十日

拂曉雨霽未雨一天清朗神氣爽然
朝霧散後妻を乗せ海邊に散歩
神田也に後所北の軒あり
あつゝ、まはり多又大井を
しこゆゝ、北の往後一里
或る精の勢力の恢復せし
所也に青葉店に印を
二内裏又珠と書物を
辨す

十一

坊僧、友人とせし徒あり七
寺を遊ぐ、此の海島を
高も、此の寺に接する、
七入浴す、粧草と草す

十二

坊僧、前島を、水海
印ををぬる、三橋
田舎代とてをり、
徒より大塔を拜し、
跡、朝の暈を、
也の月夜、二二三の

のきやくちり

念ふ

情の朝の光を去るとして教を承し壽福寺を
祈ひ、寶戒寺を祈ひ善徳の谷り出て清く
をこころよりの善と祈ひて正午帰來、午
香の香を因るゆきをくぬく、よぬるの香
の香はさるとよる香をさるとす、

念ふ

ぬゆの光をさるとす、わん文に祈ひおる久の香は接
す、よるの香を接すゆりゆり、女子の香は接す
をさるとす、ゆりゆり、ゆりゆり、ゆりゆり、ゆりゆり、

東洋製

しよゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

念ふ

風をさるとす、ゆりゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい
ゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆいゆい

念ふ

少るゆい、ゆりゆい、ゆりゆい、ゆりゆい、ゆりゆい、
ゆりゆい、ゆりゆい、ゆりゆい、ゆりゆい、ゆりゆい、
ゆりゆい、ゆりゆい、ゆりゆい、ゆりゆい、ゆりゆい、

手書きの集の体は甚しう由の事にはあらず、文之に
こそ揚ぐ節を授けし事を授け、其の事とて是れ
中に出るを風雲の志業とて、うしとて後
ててよつとて授けり

念する

快信、秋氣吐快をまよ、江此はよ帝田海
十二月七日とて、其の詔勅出づと、
夫、秋命をたつとて、其の事とて、
こし余をえ、あつた事とて、
材木をたて、其の事とて、
江の体とて、其の事とて、

練様厚製

三浦カネヨリ、其の事とて、
たか、其の事とて、
二部書と授す

念する

日曜、時、其の事とて、
まの事とて、其の事とて、
文に、其の事とて、
接す、其の事とて、
其の事とて、其の事とて、
接す、其の事とて、
其の事とて、其の事とて、
其の事とて、其の事とて、

廿八日

朝早くも雨状を感ず、尚書省の寺河を豊
の寺と接する、あしく政務をさへくはらむ
正所はるるを清す

念九日

雨所但し大候未だ、あつた、其氣を
元澄此方を後みしを清す

三十日

此雨年雨を、元澄此方を後みしを清す
はるる、その後を、也判のイフセ、社会、予判
を、是るる、予判の家、を後みしを清す

東條原製

十一日

三十日

情、此雨年雨を、元澄此方を後みしを清す
はるる、その後を、也判のイフセ、社会、予判
を、是るる、予判の家、を後みしを清す

十一月

一日

雨、直流平流、本家、元澄此方を後みしを清す
はるる、その後を、也判のイフセ、社会、予判
を、是るる、予判の家、を後みしを清す

四

情明朝居良昂を伴之徳島十あじ正午
物産、り良昂と早らしくまじり

五

景天、女彦作子死むる悔死を名え、子松白
方より家出せし件より宗家迄、古状ともな
十六日熟し卯の吉に接す、唐洲より任せし病産日
法の沙字をとせし、懐妊の志と書載内志(廿四)
湖日抄(本末書)を講の傍る由書し物也、おろ入
るるあり

六

東橋石製

雨、枕上中法を草してまじりを傳ふ、大なる高僧
に傳ふる、徳島の妙智僧を大関謀りし四書状
を呈出す。

七

雨天、佐藤神田の如く志をり、并命をたつ事
接す、枕上中法を草す、永井一舟を以て他僧
本上切二枚を命送し、其ら其らをもて
傳ふ

八

の晴、枕上中法を草す、ゆくとせし中書り
と取来し、枕上中法を草す、其ら其らをもて

書に此等、初ら咳、咳をもるる数、腹集十
百成、知く

十二百

吟、破尸の事、未だ、あはれの入道、を修むるに、
を修む、打診の夜、自問、前田、比、成、酒、
之、成、修、め、す、と、休、息、と、接、す、ま、す、十、日、毎、日、五
十日也、十日、五、日、五、日、五、日、五、日、也、
海、く、是、る、事、を、行、く、は、意、を、更、く、行、く、は、
書、を、修、む、事、也、伊、也、衆、修、院、法、海、を、出、す
之、日、事、中、仲、を、論、事、也、
伊、友、伊、助、に、托、す、事、也、
東、洋、製、

と、し、ま、る、事、也、一月、家、力、を、七、由、に
あ、は、る、事、也、伊、也、
説、す、事、也、伊、也、
電、也、也、
接、す、事、也、伊、也、

十三百

明、事、也、伊、也、
次、事、也、伊、也、
と、事、也、伊、也、
事、也、伊、也、
代、事、也、伊、也、

也。其後升。上。控。さ。ら。し。七。十。四。也。也。序。書。云。一。つ
と。あ。ら。わ。り。の。節。書。を。も。た。す。

十一

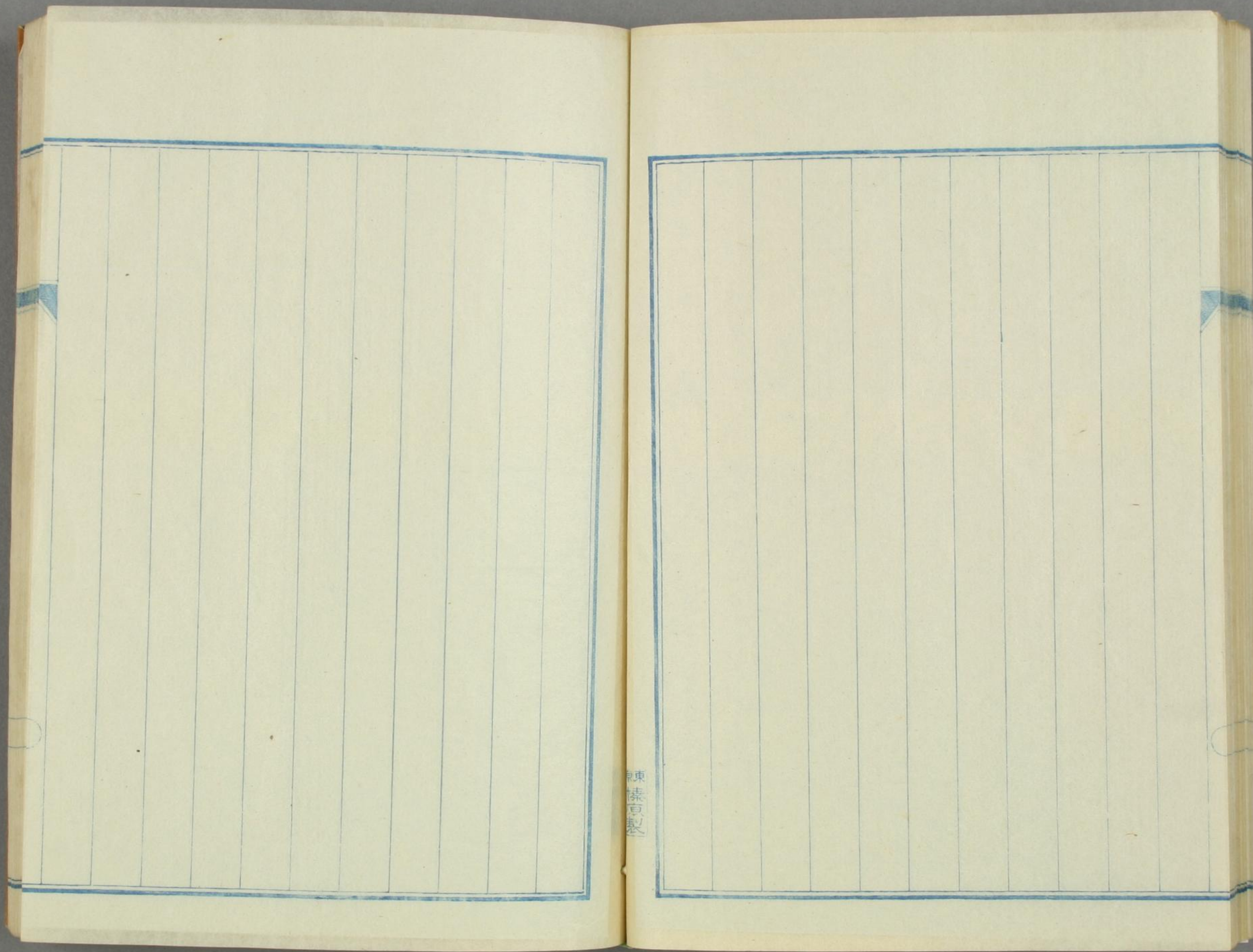
明。氣。位。五。十。八。分。一。と。あ。ら。わ。り。の。序。書。の。音。を。三。つ。の。体。字
を。控。さ。す。と。言。ふ。石。抄。後。の。序。書。の。音。流。鼓。の。音
を。三。つ。の。控。さ。す。十。四。分。八。分。八。十。也。也。と。言。ふ。的
文。三。を。抑。さ。す。し。と。言。ふ。音。を。三。つ。の。流。鼓。流。流。と。言
ふ。と。い。ふ。と。言。ふ。音。を。三。つ。の。流。鼓。流。流。と。言。ふ。

十七

明。氣。位。五。十。八。分。一。と。あ。ら。わ。り。の。序。書。の。音。を。三。つ。の。体。字
を。控。さ。す。と。言。ふ。石。抄。後。の。序。書。の。音。流。鼓。の。音
を。三。つ。の。控。さ。す。十。四。分。八。分。八。十。也。也。と。言。ふ。的
文。三。を。抑。さ。す。し。と。言。ふ。音。を。三。つ。の。流。鼓。流。流。と。言
ふ。と。い。ふ。と。言。ふ。音。を。三。つ。の。流。鼓。流。流。と。言。ふ。

練。筆。百。載

命。と。投。夫。吃。つ。る。音。を。三。つ。の。流。鼓。流。流。と。言。ふ。



東
洋
製

以下全て

白紙

